

怒れる人々と世界・日本～その対処と活用～

2018年8月
浩志会研究会員代表幹事
園田庸（外務省）

1 はじめに

いきなりですが、「何だか最近イライラしませんか?」。電車の中で座っていて真正面に立っている人のカバンの紐が顔につきまってきた時、歩きスマホをしながら向かってきてぶつかった相手から逆にぶつかったことについて文句を言われた時、などなど。皆さんの職場、ちょっとした生活の一場でイラッとくると、すなわち「プチ怒り」は以前に比べると多くなっている、あるいは、その「プチ怒り」をSNSといった場で即座にはき出すことが多くなっているように感じられます。

話は海外に飛びます。私自身の海外駐在経験は中国、米国、韓国の3か国ですが、そのうち中国（2004～06年駐在）、韓国（2014～17年駐在）において、日本に向かって怒りを爆発させる人々（中国：2005年反日デモ、韓国：慰安婦等歴史問題関連のデモ）を目の当たりにしてきました。この人たちの怒りは本当に日本に対するものなのか、怒りの理由は違うところにあるのではないかと、日本に対する怒りがあるとしてもそれは歴史問題だけなのか等、本来業務を超えて、一日本人、一個人として当時様々なことを考え、また、いまだに色々思い悩んでいます。

以上は、ほんのわずかな個人的な経験の例ですが、これに限らず、世の中を動かす（あるいは騒がす）様々な出来事、ニュースのほとんどにおいて、その背後で人々と社会の「怒り」が見え隠れしているのではないかと——こうした普段からの思いが、今回のテーマを設定した大きな背景にあります。

以下、テーマ設定の背景、問題意識の詳細を更に述べ進めていきたいと思います。

2 研究テーマの背景・問題意識

(1) 「怒り」が安易に露出

今、私たちが生きている社会を見渡すと、個人、家庭という小さな単位から、省庁・会社、地域社会、日本、世界といった大きな単位に至るまで、それぞれのレベルにおいて様々な問題に直面しています。レベルが異なるゆえ、これらの問題の規模、重大さは千差万別ですが、問題が生じる原因、生じた後の受け止めなどにおいて、その問題にかかわる人々や社会から「怒り」という感情表現が表出していることが多いかと思えます。

こうしたことは何も今だけの問題ではなく、古くから存在するものであり、過去の先人たちは、「怒り」にどのように向きあうべきか、「怒り」をいかに制御して問題を解決するか、といったことに骨を砕いてきました。例えば、仏教の教えでは、「怒り」には基本的な怒りと9つの怒りの10種類があり、まずはこれらをしっかり認識することが重要とされています¹。

小さい頃であれば、「怒り」をそのまま出しても子どもだから仕方がない、と周りは思ってくれましたが、成長に伴い「怒り」をいかに制御するかを学んでいるはずであり、大人になってまで「怒り」をそのまま出すのは、それこそ大人気ない、とみなされるのが普通です。

しかし、現状をみると、その大人でさえも、「怒り」を簡単に出してしまうケースが増えてきているように感じます。上記1に記した電車の中での「プチ怒り」が、プチで終わらずに「怒り」となって出た結果、乗客トラブルが発生し、列車の遅延をもたらすケースが少なくありません。

そして、特に今は、「怒り」を即時に、直接的にはき出す格好のツールとして、SNSというものが存在しています。誰々のツイッターが大炎上し、その人が謝罪に追い込まれたというニュースはもはや日常茶飯事になっています。

¹ アルボムツレ・スマナサーラ『怒らないこと 2—役立つ初期仏教法話〈11〉』（サンガ新書、2010年）によると、仏教において「怒り」は、①基本的な怒り（ドーサ）を基に、②激怒（ヴェーラ）、③怒み（ウパナーハ）、④軽視（マッカ）、⑤張り合い（パラサ）、⑥嫉妬（イッサ）、⑦物惜しみ（マツチャリヤ）、⑧反抗心（ドゥツバチャ）、⑨後悔（クックツチャ）、⑩異常な怒り（ビャーパーダ）の10種類あるとされています。

ちなみに、トランプ米大統領もツイッターのヘビーユーザーとして有名で、現職になってからも日々ツイッターに投稿し、時には、自らを批判する人物や勢力を、強い「怒り」をこめて非難するツイートが即時に投稿されて、大きなニュースになっています。

以上はほんの一例ですが、子どもから大人、更には高齢者に至るまで、性別や国籍等の分け隔て無く、「怒り」を安易に露出することで、人々や社会が何かとげとげしくなり、その「怒り」をぶつけられることによって極度に萎縮するような状況が多くなってきているように思います。最近、権力者など上への忖度ばかりに走り、その人や組織の能力が著しく劣化してしまっていることが問題となっていますが、その忖度も、上の「怒り」、そして、そこから生じる制裁をおそれるがゆえ、という部分もあるように思えます。

安易に露出する「怒り」が、人々や社会の成長、発展の阻害要因になってきているように思えてなりません。

(2) 二極化の進行と「怒り」の増幅による責任感の喪失

次に、私自身危機意識を有しているものの一つとして、多くの社会において「富める者・富まざる者」「勝ち組・負け組」などの「二極化」が進行し、その2つの極の間で「怒りのやり合い」「怒りの再生産」が起きて、更なる二極化に拍車をかけ、その間にいるべき「平均的な」存在の希薄化、空洞化が生じていることがあります。

再び日韓関係にかかわる例になりますが、日本国内での韓国及び北朝鮮の人々に対するヘイトスピーチが大きな問題になりました。「怒り」が非常に攻撃的な形である特定の対象（在日韓国・朝鮮人）に向けられ、その対象、及び背景にいる人々・社会（韓国・韓国人、反ヘイトスピーチ勢力）の「怒り」を引き起こし、その「怒り」がまた跳ね返ってヘイトスピーチ側、更には、韓国等の反日的な姿勢に批判的な人々の「怒り」を引き起こす、・・・といった形で、「怒り」が拡大再生産されていきました。日韓・日朝関係の冷却化・停滞も「怒り」の拡大再生産に加担し、その「怒り」の拡大再生産が更なる関係の冷却化をもたらすという悪循環も生じました。冷静に状況や物事を捉え、「大人の態度」で対応すべきところ、それがなかなかできない状況がしばらく続きました。

このほか、米国におけるトランプ政権の誕生、英国のEU離脱なども、それまでの社会システムにおいて「勝ち組」と「負け組」の二極化が進行し、既存のシステムに対する「負け組」の「怒り」が生み出した現象と言えるのではないかと思います。国と国との関係に広げてみれば、米中貿易戦争など、国と国のエゴがぶつかり合い、それが互いの国に対するそれぞれの国民の「怒り」を惹起し、更に対立を激化させ、問題の解決をより困難にさせる、といったことが多く見られるようになっていきます。

このように人々や社会が二極化し、その極の間で激しい非難合戦が生じている状況において、自由と民主主義が確立した社会であればあるほど、政治などが極端な方向に向かいやすい、ということは過去の歴史から一定程度証明されています。典型例はナチスです。

ナチスを大学で模擬体験するゼミを開講している田野大輔氏によると、「集団の目標として大学構内の『リア充』（カップル）の排除を掲げ、彼らを糾弾する掛け声」を決め、実際に、大学構内のカップル（サクラ）に対して「何度も怒号を浴びせているうちに参加者の声が熱をおびてくる」、このように「上からの命令に従い、他のメンバーに同調して行動しているうちに、自分の行動に責任を感じなくなり、敵に怒号を浴びせるという攻撃的な行動にも平気になってしまう」、すなわち「責任感が麻痺する」状態が生じる、と解説しています²。

二極化して、その集団の間で「怒り」が飛び交うような状況になった時、その中にいる人々や社会から責任感というものがなくなる危険が高まります。二極の間に継ぎ目ない形で広く「中間」「中立」という存在があれば、特にそれぞれの極に近い「中間」の人々が二極の間をとりなしたり、それぞれの極の人々を諭したりなどして、責任感を回復させることができるものと思います。しかしながら、二極化の極度の進行で「中間」という存在が希薄化・喪失することで、もはや両極において責任感を回復できない状況に追い込まれてしまいます。

二極化の進行と「怒り」の増幅により責任感が喪失し、回復も不可能になってしまうことになると、人々や社会はいったいどうなってしまうのでしょうか。

2 田野大輔『私が大学で「ナチスを体験する」授業を続ける理由 人はいとも簡単にファシズムになびく』（現代ビジネスオンライン、2018/7/16、<http://gendai.ismedia.jp/articles/-/56393>)

(3) 「怒り」が原動力というケースも

以上は、「怒り」を否定的にとらえる視点から述べてきましたが、「怒り」を肯定的にとらえる視点もあります。

2014年にノーベル物理学賞を受賞した中村修二カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授は、受賞会見の場において「怒り (anger) がすべてのモチベーションだった。怒りがなければ何も成し遂げられなかった」「怒りを原動力にしたら青色発光ダイオードができた」と述べています³。

その他にも、スポーツを筆頭とした競争の場、民衆の力による独裁の終えん、というものにおいては、「怒り」を力に変えて物事を動かすといった状況が多く見受けられます。

そうした「怒り」は、上記(1)や(2)で述べてきた「怒り」と異なるものなのでしょうか。ひょっとしたら、「競技で勝利した」「革命が成功し独裁を終わらせた」など、結果が良ければ「良い怒り」、結果が伴わなければ「単なる(悪い)怒り」、という程度のものかもしれません。あるいは、原動力にできたのは、「怒り」を上手くコントロールし、活用することができた、ということかかもしれません。単純に「怒り」を抑えるだけでなく、上手に活用する方法というのも考えていく必要がありそうです。

(4) 人間の原始的な部分を改めて見つめ直す

上記とは若干違う視点からもう1点述べさせていただければと思います。

言わずもがなですが、「怒り」は、「喜怒哀楽」と称される最も基本的な感情表現の一つで、人間に限らず、動物にも備わっています。普段は可愛らしいペットが何かの拍子で突然怒り狂う姿には人間ですらオロオロしてしまいます。

「喜怒哀楽」のより根底にあるものとして、愛情、欲望といったものがあります。愛情や欲望が満たされた時に「喜び」や「楽しみ」が、その逆に、そうできなかった時に「怒り」や「哀しみ」が感情として動物の外部に発露します。

³ 小林浩志『「怒りエネルギー」が導く“成功”と“破滅” ノーベル賞受賞者と芸能人落書き騒動に学ぶ』(東洋経済 ONLINE, 2014/10/13, <https://toyokeizai.net/articles/-/50181>)

一方で人間は、動物と異なり、単純な表情や動作だけではなく、言葉で表現することや、演劇・映画といったよりデフォルメされた形で表現することなど、より複雑かつ多様な形で感情表現ができます。それゆえ、人間の感情表現は、他者、組織・社会といった集合体に対し強い印象、影響力を与えています。

以上を念頭に、「怒り」という基本的な感情表現を通じ、人間の根本的な、原始的な部分、すなわち、人間の愛情や欲望といったものを真面目に議論してみるのは面白いのではないのでしょうか。そうすることで、人間そのもの、そして、人間が構成する社会そのものをミクロの視点から捉え直すことができるのではないかと思います。

3 研究を進めるに当たっての留意点

上記2では、私自身の思うところを書きなぐるような形になりましたので、あとは、各フォーラムでの議論に委ねたいと思います。どのような方向で議論・活動をするか、どういう結論に導いていくべきか、いずれもオープンです。是非、深みのある、楽しい議論と活動、そして中間全体研修会及び最終全体研修会で素晴らしい発表がなされることを期待しています。

その上で、主に昨年度1年間の研究会員活動を通じて感じたことを踏まえた考え方ですが、今年度の研究を進めるに当たっての留意点をいくつか列挙します。参考にして頂ければ幸いです。

(1) 日本・世界の危機に立ち向かう視点

上記2でもいくつか触れましたが、このままだと日本や世界はどうなってしまおうと思うことが少なくありません。特に、私たち浩志会研究会員は、日本社会の中で、更には世界の場で中核を担う立場に立ちつつあり、日本や世界の将来を憂い、自らそれらの危機に対して立ち向かうべき存在であるべし、と言われるのは必然だと思えます。過度に悲観的になる必要もありませんが、強い危機意識をもった議論を展開して頂きたいと思えます。

これに関して、最近、2017年5月の経済産業省の次官・若手プロジェクト「不安な個人、立ちすくむ国家～モデル無き時代をどう前向きに生き抜くか

～」⁴を皮切りに、国土交通省（「未来シナリオ～タブー視されてきた難題にチャレンジ！～」⁵）、総務省（「新時代家族～分断のはざまをつなぐ新たなキズナ～」⁶）、農水省（「この国の食と私たちの仕事の未来地図」⁷）といった中央省庁の若手官僚による問題提起ペーパーが次々と発表されています。こうしたものも議論そのもの、また、議論する際の意識の土台として参考にしてみてください。

（２）議論はできるだけ広くかつ深く、「机上の空論」は避ける

これは、浩志会が築き上げてきた「伝統的なスタイル」と言っても良いかと思います。日本と世界の問題を大きく論じるためにも、議論を狭くさせすぎない、一方で、広げすぎて浅くさせない、といった点を強く意識することが必要と考えています。

また、理論突き詰めに走らず、現実の問題をどうするかに焦点をおくという点も重要です。ミクロの視点とマクロの視点を行き来しながら、目の前にある問題、今は見えないが今後生じうる問題を具体的に掘り起こし、それらの問題にいかに対応すべきか、ということを経験や活動の基本的な指針の一つに据えて頂きたいと思います。

そのためにも「事件は現場で起きている」ということで、定例会以外のフィールドワークも（可能な範囲で）大いに行ってください。現場にいる人々に積極的に会い、話を聞くことは、今回のテーマの議論を深めるのみならず、皆さん個々人の人生をより豊かに、深いものにすることができます。

（３）過去をひもときつつ、長期的な視点で

私たちが議論すべきは、現在の問題にとどまらず、30年先、50年先の将来を見据えた問題であることは論を待ちません。その際、例えば「30年後を議論する」場合、一旦30年前に戻り、その時「30年後＝今」をどう考えていたかを思い返してみると、より議論の幅をもたせることができると考えます。是非、時間軸を長くにとって議論して下さい。

4 http://www.meti.go.jp/committee/summary/eic0009/pdf/020_02_00.pdf

5 <http://www.mlit.go.jp/common/001228770.pdf>

6 http://www.soumu.go.jp/main_content/000548081.pdf

7 http://www.maff.go.jp/j/p_gal/min/attach/pdf/180403-4.pdf

これに関し、機会あるごとに古典、先人の言葉に立ち返ることをお勧めしたいと思います。先人たちも色々と悩み、議論して、一定の結論を古典や格言などにまとめています。こうした先人たちの言葉、考えが、現在、あるいは、これからの未来の問題にすべて合致する、当てはまるとは言い切れませんが、かなりの部分でいまだ有効であるということが多く、また、少なくとも、議論を展開していく際に、目を見開かせるようなことがいくらでもあります。「温故知新」も議論の基盤の一つに置いて頂ければと思います。

(4) 研究会員個々人の魅力を最大限引き出す議論，交流を

これから研究会員活動を1年間行っていくと段々と分かってくるかと思いますが、それぞれ異なる組織において第一線で活躍する方々は本当に能力、魅力、潜在力の宝庫です。私自身、過去1年の研究会員活動において、これほどまでに魅力的な人に一気に出会えたことはなかったと思っています。

そうした人々が持てるものをいかに発揮して、議論をより深いものに、また、「オモロイ」ものにして頂ければと思います。無論、素晴らしい人々の出会いという何よりも得がたいものを得られる絶好の機会になりうるのは間違いありません。

(5) 肩に力を入れすぎず，自然体で

これは若干私自身の思い、信条に過ぎない感もありますが、「ゆとり」や「遊び」こそ自由な発想、活発な議論、継続的な活動を生み出す、と思っています。これまでに述べた点と若干矛盾が生じるかもしれませんが、是非、肩に力を入れすぎず、自然体で議論、活動に臨んで下さい。

※本稿における意見・考え方は、筆者の個人的見解であり、浩志会及び所属組織とは無関係です。

以上